

孤島に描かれる純愛―三島由紀夫『潮騒』

目次

はじめに

一 時代背景と恋愛

一―一 『潮騒』に描かれる恋愛

一―二 戦後の恋愛

一―三 純愛を読み解く

照吉の視点

新治の成長

存在しないきっかけ

二 内地と孤島

二―一 内地と流行

二―二 「神島」

二―三 孤島での恋愛を描く意味

「清浄」な島

新たな自由

三 『潮騒』と現代

三―一 なぜ『潮騒』は執筆されたのか

三―二 今『潮騒』を読む意味

おわりに

参考文献

引用文献・注

はじめに

『潮騒』は、昭和二十九（一九五四）年六月に書きおろし長編として新潮社より刊行された。本作は計五回映画化されており、一度目は小説と同じ一九五四年に、久保明と青山京子主演で公開された。

本稿では二〇二〇年に新潮社より刊行されたもの（昭和三十年発行・令和二年新版発行）を本文として論じる。

『潮騒』は、三重県の伊勢湾入口に位置する神島をモデルとした「歌島」を舞台に描かれる恋愛小説である。漁師である十八歳の久保新治は、宮田初江に恋心を抱く。初江も新治に惹かれるが、島の有力者である初江の父・照吉に認められなければ二人が結ばれることはない。美しい初江の入婿の座を狙う川本安夫と、島の燈台長の娘である千代子によってまかれた噂という障壁がありながらも、ついに新治は照吉の持船である歌島丸にて手柄をあげ、初江の婿になることを許されるのである。

本稿では、恋愛・結婚に焦点を当て、本作品が描かれた時代の恋愛と本文中の恋愛を比較し、また、舞台が孤島であることによって、恋愛のあり方にどのような影響・効果もたらされているかを検討していく。そして、我々が今『潮騒』を読むことの意味を見出したい。

一 時代背景と恋愛

ここでは、『潮騒』に描かれる恋愛と、戦後の昭和三十年前後という時代に一般的であった恋愛とを比較する。

本文中の時代については、新治が「一昨年新制中学を出たばかり」（八頁）で、「父が戦争最後の年に機銃掃射をうけて死んで以来、新治がこうして働きに出るまでの数年間」（一三頁）という記述がある。ここから、新治が働きに出たのは一六歳で、父が亡くなったのは一九四五年とわかる。「数年間」が明確ではないが、本文中の時代も、小説が刊行された一九五四年、本稿ではきりのよい一九五五年（昭和三十年）と仮定し、論じていく。

一―一 『潮騒』に描かれる恋愛

『潮騒』に描かれる恋愛は次の通りである。

島一番の有力者である宮田照吉は、一人息子がなくなったことを機に、志摩の老崎へ養女に出していた末の娘・初江を呼び戻す。新治は、初めて海岸で初江を一目見た時から、

名前も何も知らないにもかかわらず心を惹かれる。その後、二人は観的哨にて遭遇したことをきっかけに仲を深める。新治が落とした給料を初江が届けた日には、触れるだけの接吻をした。休漁日に観的哨にて待ち合わせると約束し、ついに訪れた嵐の日。二人は雨に濡れた衣服を乾かしながら裸で抱き合い、初江は、新治の嫁になると決めた、と口にする。しかし、その帰り道を燈台長の娘であり、新治に想いを寄せる千代子に見つかってしまう。千代子は、初江との結婚を望む安夫に告げ口をする。あつという間に島中に悪い噂が広がり、照吉の耳にも入ったことで、二人は会うことを禁止されてしまう。新治の漁師仲間の協力のもと、二人は手紙を送り合い、照吉の眼を盗んで会おうと試みるも失敗。照吉の監視が厳しくなるのみであった。ある日、新治は照吉が所有する機帆船・歌島丸の乗組員に誘われ、同じように声を掛けられていた安夫とともに航海に出ることになる。この航海は、照吉による、初江の婿選びを兼ねていた。その航海で新治が大きな手柄をあげたことで、照吉から認められ、初江との結婚を許される。

愛し合う二人に立ちをはだかる障壁、それを乗り越えて結ばれるという、現代まで多く描かれてきた筋立ての恋愛小説である。純愛小説とされるのは、これが大きな理由だろう。

一―二 戦後の恋愛

結婚というと、見合い結婚と恋愛結婚に分けられる。見合い結婚とは、親などによる仲介のもとで男女が出会い、結婚することを指す。(現代では、マッチングアプリや結婚相談所による仲介も見合い結婚に含むこともあるようだが、本稿では不要だろう。) 一方、恋愛結婚とは、恋愛期間を経て結婚することである。小谷野(二〇〇五)^(注1)は、

歴史的に言うならば、見合いというものは結婚当日まで顔も見ることがないというように、親の取り決める結婚を近代化させるために明治中期に一般化したもの

と述べている。「顔も見ることがない」というのは見合い結婚の歴史の中でも初期のことと考えても、互いに見合い相手に関する情報が少なく、交際期間がほとんどない、あるいは短いまま結婚するというものであった。それに対し、恋愛結婚は当人同士が交際期間を決められるものである。こう見ると、恋愛結婚のほうが、結婚後の夫婦生活がうまくいくように思えるが、石川達三『結婚の生態』^(注2)にはこう書かれている。

恋愛結婚が破綻を来たすのは高い理想を描く能力をもっている知識人の特徴であって、労働者たちや小商人たちの恋愛結婚は多くは最後まで無事に過ぎて行く。女房に期待するものが家庭生活のこまごまとした幸福だけだからだ。

知識人にとっては、見合い結婚のほうがかうまくいくものであったようだ。

そもそも、恋愛と結婚が結びついたのは近代になってからのことで、前近代では恋愛は抑圧の対象であった。そこで誕生したのがロマンティック・ラブ・イデオロギーである。ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、愛と性と生殖とが結婚を媒介することによって一体化されたものであり、これが普及したことにより、恋愛と結婚を結び付けて捉えられるようになった。

『潮騒』が描かれた昭和三十年頃は、見合い結婚が約五十四%、恋愛結婚が約三十五%であり、恋愛結婚が見合い結婚を上回るのは昭和四十五(一九七〇)年頃である^(注3)。

また、昭和三十年頃は、政府が行った『純潔教育』の成果が見られるころとされ、小谷野(二〇〇五)^(注4)はつづけて、

敗戦時に子どもだった世代から、戦後一九六〇年頃までに生まれた世代は、日本史上で最も清教徒的なのではないだろうか。

と述べている。新治は「敗戦時に子どもだった世代」である。
ここで、純潔教育について説明しておく。

きっかけは一九四六年に出された「私娼の取締並びに発生の防止及び保護対策」である。この内容は大きく二つに分けられ、「公娼廃止後の風俗対策」と「闇の女」の発生防止及び保護対策」。純潔教育に関係するのは後者で、闇の女対策の一環として考えられたものであった。「闇の女」とは、街中で売春を行う女性をさし、当時はいった者たちが問題視されていた。「闇の女」の発生防止及び保護対策」には、「子女の教育指導に依つて正しい男女間の交際の指導・性道德の昂揚を図る」、「正しい文化活動を助成して青年男女の健全な思想を涵養する」とあり、これを目標として純潔教育を実施することが男女間の正しい道德秩序をうちたてることであり、新日本建設の重要な基礎と意味づけられていた。^(注5)

しかし、『潮騒』の舞台は「一軒のパチンコ屋も、一軒の酒場も、一人の酌婦もな」(二頁)い孤島であり、「あんまり悪い習慣は、この島まで来んうちに消えてしまふ」(五六頁)ため、純潔教育の必要はなさそうだ。純潔教育は、若者が健全であるための政策であり、若者に悪影響である性的なものが生活の中になれば、教育の必要はない。さらに新治は、「貧しくて修学旅行に行けなかった」(三八頁)とあり、島の外に出た経験がなく、他の島民よりも外の世界を知らないという意味で純粋な青年なのである。前述した「最も清教徒的」な世代に当てはまりはするものの、純潔教育を受けていない可能性があり、なにより教育を受けずとも新治は純潔であったといつてよい。

照吉の視点

一―一、一―二の内容を踏まえ、二人の結婚を見合い結婚と恋愛結婚の観点で見る。新治と初江は誰に紹介されたわけでもなく出会い、互いに惹かれ合ったのちに結婚した。こうみると、恋愛結婚といえそうだが。しかし、見合いこそしていないものの、結婚の決定権を持っているのは照吉だ。照吉は、新治と初江の結婚について次のように語っている。

「はじめはわしも怒っておったが、仲を割いてしまうと、初江が元気を失くしてしまつて、このままではいかんと思うた。そこで策を案じたでなア。新治と安夫をわしの船に乗組ませてじゃ、どっちが見処のある男か試してくれるように、船長にたのんだわけや。(略)船長が新治に惚れ込んでやな、こんなええ婿はないということになった。新治は沖縄で、えらい手柄も立てて来たし、わしも考え直して、婿にもらおうときめたところや」(二八〇頁)

「男は氣力や。氣力があればええのや。この歌島の男はそれでないかん。家柄や財産は二の次や」(二八〇頁)

島で威をふるっている照吉も、娘に弱い一人の親であつた。しかし、新治に対して怒っていたのに、初江が悲しむからという理由だけで結婚を許してしまつては、威厳が保たれない。あの照吉でも娘の涙には弱いのだな、と思われてしまうだろう。そこで、決め手は「氣力」だとすれば、信念を貫く島の男という姿勢を見せることができるのだ。初江の婿にふさわしいと選んだ相手、つまり新治が、たまたま初江と想い合つていただけ、ということにすれば娘も喜び、威厳も保つことができて、一石二鳥なのであつた。つまり、実際は恋愛結婚に近いものだが、照吉は見合い結婚を装っている、というのが適切だろう。

では、もし安夫が婿にふさわしいと判断されていた場合はどうだろう。娘が悲しむのを無視して結婚させたのだろうか。その想像は容易ではない。父親の立場を取るか、島の権力者の立場を取るか、照吉もその状況になれば、答えを出すのは容易ではないはずだ。新治に「氣力」があつてよかった、と思つているのは、照吉も同じなのだ。

新治の成長

新治と初江の仲を邪魔するきつかけになつたのは、千代子と安夫がまいた噂だが、直接二人を引き裂いたのは初江の父・照吉である。照吉は島一番の権力者であるため、島の住人のほとんどが恐れている存在だ。島という小さな社会では、権力者(初江にとっては親)に逆らえば逃げ場もない。十八歳で、ましてや島の外に出たことのない新治には島外逃亡

など無謀だろう。それに、新治の母と弟も無事では済まないだろう。社会から排除されてしまつては、生活が困難になる。つまり、どうしても照吉に結婚を認めてもらわねばならなかった。二人の恋愛における障壁とは、「照吉」だ。

照吉が初江の婿に求めていたのは、「氣力」であり、「家柄や財力は二の次」である。照吉は歌島丸に初江の婿候補である安夫と新治を乗せ、「氣力」をはかった。その結果、新治には「氣力」があり、安夫にはなかった。だから照吉は新治を婿としたのだ。つまり、二人が結婚できたのは、新治に「氣力」があった、それだけの理由なのである。二人を引き裂く障壁を乗り越えたのは、新治と初江が抱く恋心や、それによつてもたらされる力ではなく、新治自身の力のみである。恋愛小説においてそのような障壁を乗り越える際、二人の愛の力で、というように愛を強調して描かれることがあるが、本作は「彼はあの冒険を切り抜けたのが自分の力であることを知っていた。」（一八八頁）と締めくくられている。

恋愛小説でありながら、困難を切り抜けたのは自身の力であると結論付けるのは珍しいのではないだろうか。『潮騒』は、純愛小説といわれるが、実際は新治の成長物語と読むことができる。新治は初江と出会ったことで初めて恋愛を知り、恋愛を通して自分の中に眠っていた力、照吉が言うところの「氣力」に気が付いたのである。新治は今後も初江を大切にしていくのだろうが、それだけではない。新治は、漁師としての夢も初江も、どちらも大切にしていける人物だろう。『潮騒』は、新治の長い人生の中の、成長の一場面を描いた小説なのだ。

存在しないきっかけ

新治と初江との間で恋愛感情の告白があったのは、「私、あんたの嫁さんになることに決めたもの。」（八〇頁）という初江の台詞が最初である。二人の間には現代で言う交際関係はなく、「嫁になる」という初江の発言の後も新治がそれに対して返事をするわけでもなかった。新治の場合も、初めて浜辺で見かけただけでなんの会話もなかった初江を意識し、周囲からの初江の評価を聞いただけで「いつかわたくしのような者にも、氣立てのよい、美しい花嫁が授かりますように！……たとえば宮田照吉のところへかえつて来た娘のよう……」（二七頁）と神に祈っている。一体いつ、なぜ初江を好きになったのかが分からないのだ。しかし、あえてそのきっかけを描かない、というのも「純愛」の要素になりえるのではないだろうか。好きなどころを具体的に挙げられることももちろん悪いことではないのだが、なぜか惹かれる、という方が「運命」らしいだろう。純愛小説として読んでおきながら、好きになったきっかけがない、描かれていないから不自然だ、というのはや野暮だ。

二 内地と孤島

ここでは、舞台となった孤島の特徴と、内地での生活とを見ていく。そして、なぜ孤島が舞台となったのか、そこに描かれる恋愛について考察する。

二― 内地と流行

昭和三十年頃の内地について一部例を挙げて見てみよう。

昭和三十年、つまり一九五五年といえ、高度経済成長の始まりの時期に当たる。多くの場合、一九五五年から一九七三年のことを指す。高度経済成長期といえ、生活世界においては家電製品の普及が最も顕著な特徴だろう。「三種の神器」といわれたテレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫は、一九五〇年代後半から一九六〇年代には家庭生活の必需品となった。例えば、テレビは、一九五二年から放送しているが、高価で買うことができなかった。そのため、宣伝用に置かれた街頭テレビや、電気屋にて立つて見るものであった。価格が下がり普及し始めたのは、一九五七年末である。

しかし、高度経済成長とは、あくまでも経済が成長した時期であり、生活世界に影響が及ぶのはもう少し後になる^(注6)。本稿においては、もう少し前の時代を参照せねばならない。

では例えば、ファッションについて見てみよう。

一九五三年は、日本の女性たちのファッション意識が大きく変わった年である。その理由となる出来事は四つ。第一に、「八頭身」が美の基準となり、五頭身や六頭身の女性たちのあいだでは、髪型をショートカットにして調節することが流行した。第二に、日本流行色協会の発足。第三に、デイオール一行の来日。これは、アメリカンスタイルから、フランスのデイオールに乗り換えることを意味していた。第四に、「真知子巻き」。映画「君の名は」に影響を受けたもので、映画というマスメディアの一つを経由して流れだした敗戦後最初の流行現象といつてよい^(注7)。

ここではファッションを例に挙げたが、そのほかのジャンルでもそれぞれ流行が生まれている。このように、流行が生まれ、普及していくのはなぜか。そもそも流行とはどういったことを指すのか、代表的な二つの定義をあげておく。

流行とは、ある社会集団のなかで、一定数の人たちが、一定の期間、ある意図のもとに始められた同様の集団行動をとるように心理的に誘われることである。(南)^(注8)

流行は、社会の許容する範囲内で、社会生活を営む個々人の新しい社会的行為が他者との間において影響しあいながら、新しい行動様式、思考様式として社会や集団のメン

バーに普及していく過程であり、その結果、一定の規模となった一時的な集合現象である。(川本)^(注9)

では、なぜ流行が普及していくのかについて。普及するということは、流行を受け入れる、流行を採用するということである。ここで必ず引き合いに出されるのが、ジンメルの流行論である。人は、他者との同調を求める「同質性の欲求」を持ち、同時に、他者との違いや差異を求める「異質性の欲求」を持つ。この二つの欲求が流行を支える心理であるという。(注10)

流行は与えられた範例の模倣であり、それによって社会への依存の欲求を満足させる。それは個々人の行動をたんなる一例にしてしまうあの普遍的なものを与える。しかも流行は、それに劣らず、差異の欲求、分化、変化、逸脱の傾向をも満足させる。(注11)

牧園(一九八一)^(注12)は、このジンメルの説を次のように解説している。

人びとは社会や集団に適応したいという欲求をもっており、うまく適応するための行動のモデルを求めている。その際、流行は、多くの人びとが同じことを行っている、または、同じことを求めて努力しているという理由から、人びとの格好の行動モデルとなる。人びとは流行を採用することによって、自分も周囲の人びとと同じ行動をしているということで安心感をもつことができる。人びとは、このように他者との同調を希求しながら、他方で自分を他者から区別したいという欲求をも持っている。流行はまた、新しく一般に普及していないという事実によって、個々人に自分とはなにか特殊で顕著なものを体現しているという満足を与えることができる。したがって流行を身につけた人びとは、他者からの是認と妬みが混和した明らかに快い感情に出会うことになるのである。

また、流行を取り入れる動機として、鈴木(一九七七)^(注13)は次のようにまとめている。

① 自己の価値を高く見せようという動機 個人の流行採用の背後には、自分が高い価値を置いている目標を達成するための道具としてそれを用いようという動機が隠されていることが多い。個人の目標にはさまざまな水準のものがあろうが、社会的行動の水準でもっとも一般的な目標のひとつは、社会のなかでの自己の地位を高めることであろう。(略)異性による注目や関心を獲得することも、同様に、多くの人びとにとって重大な目標となる。

② 集団や社会に適応しようという動機 個人はしばしば、適切な行動の基準として流行を利用する。(略)個人は、流行を採用することによって、自分が適切な行動をとっているという安心感をうると同時に、周囲に対しても彼が他の人々と同じく適切な行

動をとりうる人間であることを証明できる。(略)要するに流行の採用は、社会や集団に適応するための簡単かつ容易な手段として機能するのである。

③ 新奇なものを求める動機 個人には、自己をとりまく環境から情報をえようとする欲求や自分自身に対する刺激を求めようとする欲求、すなわち「好奇心」とよびうる基本的欲求がある。流行はそのような欲求を満足させるべく機能する。(略)流行の採用は、倦怠感を打ち破るための、簡便かつ有効な、しかも(略)安全な手段である。

④ 個性化と自己実現の動機 人間は、一方では他人との同調を望みつつ、同時に他方では自分を他人から区別したいという欲求をもつ。従来の流行理論でいうところの「個人主義」「個性化」「差別化」などである。(略)また、個人は一般に、ある明確な立場をとることによって個性化をはかり、自己のアイデンティティを確立して、いわば自己実現を求めようとする。(略)このような欲求はしばしば、既存の社会体制や伝統に対する離脱や反抗の感情と結びつくことになる。流行は、その感情のはけ口として、あるいは意思表示の手段——しかも比較的安全な手段——として役立つことがある。

⑤ 自己防衛の動機 個人は社会の中でさまざまな束縛を受け、内的コンフリクトをかかえている。このようなコンフリクトを解消し、ともすれば傷つきやすい自我を保護するために、抑圧された感情のはけぐちが求められる。(略)もし、個人がそのような自我防衛の動機をもっているとすれば、流行の採用はたしかにそのような手段として役立つであろう。個人は流行を採用することによって抑圧された感情を発散させ、華美な流行品を身につけることで劣等感を克服しようとする。

流行は、このような欲求や動機によって支えられ、普及していくのだ。こういった欲求は戦前、戦中、戦後、そして現代と、どの時代でも関係なく人間がほぼ必ずもっているものだ。しかしこの昭和三十年という時代は戦後である。戦中に抑圧されていた欲求が解放され、社会現象として目に見えるようになった頃なのではないだろうか。流行ができるということは、欲望が発生しているということである。高度経済成長期において、その欲望がより顕著にあらわれたということであり、昭和三十年はその先駆け、前段階といっていだろう。

二―二 「神島」

では次に、北村優季『神島の歴史と空間―日本の原風景―』(二〇二二、名著出版)を参照し、神島について見てみよう^(注14)。

歌島のモデルとなった神島は、行政区画としては三重県鳥羽市となる。愛知県の知多半島と、三重県の志摩半島との間に位置する島である。『潮騒』中でも描かれるように、

漁業が盛んで、島民のほとんどが漁業や海運業に従事する。三島は昭和二八年の三月と八月の二度にわたって神島に滞在し、その際には綿密な取材ノートを残し、作品に描かれる島の記述は同時にすぐれた記録としての価値を持っている。三島が訪れたころは、ちょうど神島の人口がピークを迎えた時期に当たっていた。小説『潮騒』には、神島が陸の孤島であっても賑やかな明るい印象があるのは、そのような社会的背景があるのだろう。

神島に現存する家々や道、それらによって形成された集落も、孤島であることによって古い形態を伝えている。家屋は現代の建材が使用され、日本各地にみられる家とさほど違いはないが、その敷地や路地のように狭い道は、長年姿を変えていないように見える。集落は島の北側に位置する狭い平坦地に集中しており、それは、太平洋からの強風を避けるためである。また、南側には広い平坦地があつて水源も存在するが、そこには人家がなく、かわりにわずかな稲田が存在するという。また島の山を開墾した段々畑では、麦も作付けされているが、しかしそれらは島民の食料をまかなうには少なく、穀物を知多半島から搬入する必要があつたとされている。

昭和三十年〜四十年ころまで「神島はほとんど島内婚である」ともいわれ、不特定多数の人々が来島することはまれであつたと想像される。今日まで神島には大規模な市場は形成されておらず、限定された仲買人が来島する形式が維持されているのである。離島という地理的条件のため、外部の企業や資本が流入することはほとんどなかったといつてよい。そのため大規模な開発などは実施されず、古くからの土地所有者の権利がそのまま残ることになった。実際に開発事業などを行うにはまず大型の重機を島に運び込まなければならぬが、しかしその場合には、細いセコミチ^(注15)や急な階段道を通行しなければならず、そうしたことは現実的に不可能である。

孤島というと、外の世界から切り離された場所のように思われる。本文中で新治が言うように「悪い習慣は、この島まで来んうちに消えてしまふ」(五六頁)とすれば、孤島は純粹な場所と言える。実際神島は、現在も昔のままの景観を保ち、「大規模な市場は形成されて」いないという。しかし、純愛を描くために、純粹な舞台を用意した、そう言うてしまふのは単純すぎる。なぜ孤島を舞台にしたか。時代背景をふまえると次のように考えられる。終戦後、日本はアメリカ率いる連合国軍に占領されていた。それまでの日本が、次々と変えられていったのである。結果的には、実施された政策が、日本にとって悪いものばかりだったわけではないが、当時の人々には不安だったかもしれない。連合国軍による占領は一九五二年に終わるが、その後は「二―一 内地と流行」で述べたようにファッションなど海外の文化が入ってくるようになり、多くの人々がそれを取り入れるようになる。日本が日本でなくなる、そう思った者もいたかもしれない。その意味で、孤島は内地と比較して、純粹な日本のままであつたと言えるのだ。日本が変わりゆく時代に、かつてのまの姿の日本を舞台にしたかつたと考えられるだろう。

しかし、いくら内地に比べ純粋とはいえ、島内での自給自足だけでは生活できない。前述したとおり、「穀物を知多半島から搬入」しなければならなかったし、そもそも漁業を営んでおり、獲れた魚を売るためには市場へもっていかなければならない。島に市場を作らず、「限定された仲買人が来島する形式が維持」されていても、船に乗って外の市場へもっていく人がいるのならば、外の文化と触れているのだから、同じことに思う。純粋な場所であっても、いつまでも変わらずにはいられないのだ。

二―三 孤島での恋愛を描く意味

「清浄」な島

「おれはいつか、働らいて貯めた金で機帆船買って、弟と二人で、紀州の木材や九州の石炭を輸送しようと思っとるがな。そいでお母さんに楽をさせてやり、年をとったらおれも島にかえって、楽をするんや。どこを航海していても島のことを忘れず、島の景色が日本で一番美えように、(歌島の人はみんなそう信じていた)、またア、島の暮しはどこよりも平和で、どこよりも仕合せになることに、力を協せるつもりでいるんや。そうせんと島のことを、誰よりも思い出さなくなるによってなあ。どんな時世になっても、あんまり悪い習慣は、この島まで来んうちに消えてしまう。海がなア、島に要るまっすぐな善えもんだけを送ってよこし、島に残つとるまっすぐな善えもんを護ってくれるんや。そいで泥棒一人もねえこの島には、いつまでも、まごころや、まじめに働らいて耐える心掛や、裏腹のない愛や、勇気や、卑怯なところはちつともない男らしい人が生きとるんや」(五五、五六頁)

新治はいつも着実な考えをもっていた。自分はまだ十八だし、女のことを考えるのは早いと思っていた。多くの刺戟に触発される都会の少年の環境とはちがって、歌島には、一軒のパチンコ屋も、一軒の酒場も、一人の酌婦もなかったのである。(二二頁)

都会の少年はまず小説や映画から恋愛の作法を学ぶが、歌島にはおよそ模倣の対象がなかった。(三五頁)

孤島であることで外からの「悪い習慣」が入ってこないというところが重要だ。「悪い習慣」というのは、例えば「パチンコ屋」「酒場」「酌婦」などのことだろう。これらに触れるためには、島を出る必要がある。安夫は島を出た経験があるため、「女を買」ったことがあり、新治は島を出た経験がないため、恋愛について無知であることがなよりの証拠だ。有元(二〇〇六)^(注15)は、次のように述べている。

安夫が島の外で女を買っていたように、歌島丸の船長は港々に《女》をおいていた（一四）。善玉悪玉がハッキリとしている「潮騒」の中で、船長は明らかに新治の成長モデルとして造形されている人物であり、こうした船の男の対女性関係は語り手によって許容されている。歌島の外にあって男たちは、《清浄》などではないこと（外に出れば《清浄》ではなくなること）が作中で示されているのである。

「清浄」な島の内にいる者は当然「清浄」であり、外に出て「悪い習慣」に触れれば「清浄」でなくなる。簡単に言えば、都会に染まるということだ。

ただ、「船長は明らかに新治の成長モデルとして造形されている人物」という部分には異議を唱えたい。確かに新治もいずれは島を出て、「悪い習慣」に触れることになるだろう。しかし、「悪い習慣」に触れた者が必ずしも「清浄」でなくなるとは限らない。新治とその他の島民との違いは、島の外へ行ったことがあるか、ないかである。「一―二 戦後の恋愛」にて述べたとおり、新治は修学旅行に行っておらず、島を出るのは漁の時のみである。本来であれば、修学旅行で初めて島外の世界を知るのだが、新治はそうではなかった。そして、修学旅行は内地の文化に触れに行くものだ。普通なら、そこで外の世界に興味を持つはずが、新治にはその機会がなかった。文化に触れるためにはじめて島を出た者と、漁や仕事、つまり家族や生活のためにはじめて外に出た者という違いがある。新治は他の島民より純粹であった期間が長く、家族思いで誠実な青年だ。「悪い習慣」に染まり、家族や初江を裏切るようなことはしにくいと考える。

また、すでに照吉による初江の婿選びにおいて島を出た際に、道中で「悪い習慣」に触れているかもしれないと思うかもしれないが、それはないといってよさそうだ。本文中にはそのような描写は見られない。鳥羽に到着した際は、「船員たちがかえるまでケビンで休んでいるように」（二五六頁）言われ、沖縄では、「一般の船員は上陸をゆるされなかった」（二六〇頁）とある。そもそも「船の生活は忙し」（二五九頁）く、怠けている安夫の分まで働いていた新治は、「毎夜寝る前のひとときか、当直の折でもなければ、初江の写真に逢う暇がな」（二五九頁）いほどであった。島の外の「悪い習慣」に触れる暇などなかっただろう。

新たな自由

「彼は遠ざかる歌島の姿を眺めた。そのとき、この島に生れこの島に育って、何ものよりも島を愛して来た若者が、今は島を離れたいと切に思っている自分に気づいた。船長の申出をうけたのも、自分が島を離れることを希んでいたからである」（二五三頁）

「島の姿が隠れると、若者の心は寧ろかになった。日々の漁とはちがって、今夜はもうあそこへ帰らなくていいのだ。俺は自由になる、と彼は心に叫んだ。こんな奇妙な種類の自由もあることを、はじめて知った」（二五四頁）

「手紙は若者に勇気を与えた。彼は腕に力が充ち、体に生甲斐が漲るのを感じた」(一五四頁)

「新治がいつまでも写真を見ていると、丸窓の端に立てかけられた写真のかげに、雨に煙った答志島が右方からゆるやかに動いてきた。……再び若者の心には寧らかさがなくなつた。希望が心を苦しめるという恋のふしぎは、しかし彼にはすでに目新しいものではなかつた」(一五五頁)

ほかの誰よりも「清浄」で、家族思いであつたはずの新治は、島を離れたいと思つて自分の気が付いた。島に帰ることを苦に思つてゐるようだ。しかし、初江からの「希望が見えてきた」という内容の手紙からは力をもらつてゐるため、恋愛に疲れたというたぐいのことが理由ではなさそうだ。おそらく、島という場所に対しての考え方が変わったのだらう。歌島丸での航海は「沖縄へ材木を運んで、往復約一ト月半で神戸港へかえる」(一五七頁)とあるので、歌島まで戻つたらもう少しかかる。二か月近く島を離れることになり、それが海という果てのない場所であつたことで、これまで一番良いと思つてゐた島の狭さに気が付いたのではないだらうか。島を離れ、その姿が見えなくなつたとき、そのちっぽけさを客観視することができたのだ。では、島の外のほうが良いと気が付いたのかというと、そうではない。新治が島の外の自由に気が付いたのは、航海に出発してすぐだからだ。外のほうが良いと思うのは、外にある具体的な何かに触れてからだらう。新治は島が嫌になつたのではなく、島を出たことで、島が一番だと信じて疑わない呪縛のようなものから解放されたともいえるまいだらうか。

しかし、島へ戻りたくないという描写があつたのは先に引用した部分のみで、その後は登場しない。新治は自由に気が付いたものの、そちらを選ぶことはなく、島で生まれ育つた者として大事にすべきものがなにかを分かつてゐたのだ。

三 『潮騒』と現代

純愛を描いた『潮騒』だが、なぜ昭和三十年という時代にこの恋愛が描かれたのか。そして、現代に生きる我々はこの小説から何を得られるだらうか。

三―一 なぜ『潮騒』は執筆されたのか

小説の執筆意図を考える際、作家について触れることがあるが、今回は三島の当時の発

言など是用いず、ここまで述べてきたことをもとに、考えることとする。

「二―二 『神島』」にて少し触れたが、戦後、連合国軍による占領や、外国文化の流行などにより、日本は変化を遂げるようになった。変化は悪いことではない。しかし、それを受け入れられない人がいるのもまた事実である。『潮騒』には、戦後の要素は多少描かれるものの、外国とのいざこざや、外国文化への欲求も描かれることはない。皆が持っているから自分も欲しいだとか、そのような薄っぺらな欲求が存在しない、良い意味で何もない社会だ。登場人物のほとんどが純粋で、悪意のない平和な社会。変わりゆく日本では、このような純粋さも失われつつあった。『潮騒』では、外国の文化に染まっていけない若い男女が、周囲に影響されることなく互いに惹かれ合う。二人を引き裂く困難があり、しかしそれ乗り越えたのは愛の力などではなく、一人の青年の気力と強い意志である。高度経済成長の前段階であり、他者と同じでいたい、また一方では違っていたいという複雑な人々の欲求が増加し始めた時代に、新治という純粋無垢な青年を描くことで、欲求がなくとも幸せになれることを示しているのではないだろうか。周囲の影響を受けていない純粋なままの新治が、変わらないことの魅力を伝える役割を担っているのだろう。

三―二 今『潮騒』を読む意味

「一―三 純愛を読み解く」にて述べたとおり、新治にとって初江との恋愛や結婚は、最も大きなことではない。新治は初江と出会っていなくても母と弟のために働いていたし、「将来自分の機帆船を持って、弟と一緒に、沿岸輸送に従事する」(二二頁)という夢を持っており、充実していた。初江との出会いは、新治が家族以外の大切な人を得るために必要だったのであり、それが恋愛という形であっただけである。大切な人がいるから頑張れることがあり、耐えられることがあった。結果、そのような大切な人の存在が、新治の中に潜在していた男気を引き出した。新治は恋愛に盲目的になっているわけではないのだ。島を離れたときに「自由」を感じたように、初江と一緒にいることだけが幸せだとは感じていないのである。恋愛はあくまでも彼の成長に必要な一つの要素であり、今後も新治はさまざまな経験をして成長していくのだろう。

そして、新治が成長できる良い恋愛ができたのは、孤島という純粋な場所であったことが一つの理由だ。そのおかげで新治は純粋な青年に育ち、彼に悪意があったのは、安夫に初江の写真を持っているかと聞かれた際に持っていないと嘘をついた(一六〇頁)、この時くらいといつてよいだろう。この場面すら、悪意と言いつけないほどである。これほどに誠実で純粋な人間は、現代日本にはごく稀であろう。インターネットが発達した現代では、いくら孤島といっても、もう『潮騒』の頃のような純粋な場所ではなくなっているはずだ。純愛小説だと高く評価されるのは、もう我々が決して体験できない恋愛であることが関係しているのかもしれない。『潮騒』は、現代のように便利で複雑な社会ではなく、不便で

単純な社会の恋愛を描いている。日本に不便な地域がなくなること、『潮騒』のような世界がフィクションになってしまった。技術の進歩は、このような小さな悲しさを生み出すのだと、我々に気づかせた。

おわりに

『潮騒』は、純愛を通して一人の青年が成長する物語であった。現代の我々にとってはフィクションだが、かつての日本にはこのような純愛が存在したかもしれないと思うと、時代の変化が惜しいと思うてしまう。

本稿の題材に『潮騒』を選んだのは、大学の講義内で三浦友和と山口百恵主演の映画「潮騒」を鑑賞したからだ。ほかにも谷崎潤一郎の「春琴抄」や、堀辰雄の「風立ちぬ」を鑑賞する機会があり、それらを通して三浦と山口のファンとなった筆者は、卒論の題材を決める際、このペアで映画化された作品にしようと思い立った。候補の中から『潮騒』を選んだのは、純愛が好きだから、という単純な動機であった。しかし、研究・執筆を始めればさまざまな未知に出会い、充実した時間であったと振り返ることができる。きっかけは何だっけ良かったのだ。純愛が好きだから選んだ『潮騒』は、人生で最も思い入れのある作品となった。

執筆期間中に神島を訪ねることは叶わなかったが、映画を見た後に小説を読んだため、島の様子も容易に想像できた。また、筆者の脳内では、新治は三浦、初江は山口の姿で再生された。本稿の導入にも述べたとおり、『潮騒』は五回映画化されているが、講義内で鑑賞した「潮騒」が三浦・山口主演のものでなければ、『潮騒』は本稿の題材にはならなかっただろう。筆者は、三浦演じる新治が好きなのだ。「にこにしながら皆の意見をきいているだけ」(二五九頁)の新治がかわいらしくて仕方がない。新治には小説に書かれていない未来もずっと変わらず誠実でいてほしいという願いを込めて、本稿を執筆した。

本稿執筆に際し、多くのアドバイスをくださった永井聖剛先生、励まし合ったゼミの仲間たち、進捗に深く口出しせず、車で一時間の大学図書館まで送迎してくれた母、たまたま大学付近に一人暮らしをはじめ、集中できる執筆場所を提供してくれた友人に、深く感謝申し上げます。

参考文献

- ・大森美沙『現代日本の若者はいかに「恋愛」しているのか 愛・性・結婚の解体と結合をめぐる意味づけ』(二〇二二年二月、晃洋書房)
- ・小谷野敦『恋愛の昭和史』(二〇〇五年三月、文藝春秋)
- ・北村優季『神島の歴史と空間―日本の原風景―』(二〇二二年八月、名著出版)
- ・小山静子ほか『セクシュアリティの戦後史』(二〇一四年七月、京都大学学術出版会)

- ・間宏『高度経済成長下の生活世界』（一九九四年五月、文眞堂）
- ・鴨下信一『誰も「戦後」を覚えていない「昭和20年代後半篇」』（二〇〇六年十二月、文藝春秋）
- ・鴨下信一『誰も「戦後」を覚えていない「昭和30年代篇」』（二〇〇八年十二月、文藝春秋）
- ・井上寿一『終戦後史 1945 - 1955』（二〇一五年七月、講談社）
- ・石川弘義『欲望の戦後史』（一九八九年、廣済堂出版）
- ・市川孝一『流行の社会心理史』（一九九三年二月、学陽書房）

引用文献・注

- 1 小谷野敦『恋愛の昭和史』（二〇〇五年三月、文藝春秋） 九八頁
- 2 石川達三『結婚の生態』（一九七二年五月、新潮社） 三四〇頁
- 3 内閣府男女共同参画局 [特一36図 恋愛結婚・見合い結婚の割合推移](#)（内閣府男女共同参画局 gender.go.jp）（最終閲覧日：二〇二四年二月二日）
- 4 注1同著、一四五頁。
- 5 小山静子ほか『セクシュアリティの戦後史』（二〇一四年七月、京都大学学術出版会） 三五頁
- 6 間宏『高度経済成長下の生活世界』（一九九四年五月、文眞堂） 四頁
- 7 本引用は、以下の文献を要約、引用している。石川弘義『欲望の戦後史』 一九八九年、廣済堂出版、四四頁
- 8 南博『体系社会心理学』（一九五七年十一月、光文社） 四一八頁
- 9 川本勝『流行の社会心理』（一九八一年十一月、勁草書房） 二〇頁
- 10 市川孝一『流行の社会心理史』 一九九三年二月、学陽書房、十七頁
- 11 円子修平・大久保健治訳『ジンメル著作集 七』（二〇〇四年九月、白水社） 三三頁
- 12 牧園清子編集・解説『現代のエスプリ 111 流行』（一九八一年十月、至文堂）、六頁
- 13 鈴木裕久『流行』池内一編『講座社会心理学3 集合現象』 一九七七年六月、東京大学出版会、一三二～一三五頁
- 14 二、四、五、六、七、二十、二一、一五七頁。
- 15 （集落の中の道のこと―引用者注）
- 16 有元伸子「三島由紀夫『潮騒』論」（二〇〇六年十二月、『広島大学大学院文学研究科論集』）